

泌 尿 器 科 紀 要

第 13 巻 第 6 号

昭和 42 年 6 月

随 想
回 顧

京都府立医科大学名誉教授 山 田 一 夫

編集部より「産婦人科と泌尿器科」について原稿をとの依頼であったが、何分にも定年退職後既に十数年を経過し、この間外国雑誌にはほとんど眼を曝したことなく、辛うじて趨勢に取残されぬように内地の雑誌を抄読している程度で、これもせいぜい自分の専門領域だけが関の山であって、他科の領域など全く発言資格がないから一応にも二応にも御辞退申したのであるが、随筆ような回顧録でも良いとの寛大な申出に甘え、漫筆を呵して綴ることとした。

筆者は大正5年に京大を卒業して直ちに高山先生の門下に入り婦人科医局に入局したのであるから、謂うなれば半世紀に亘り斯界の変遷を目のあたり見て来た訳である。当時婦人科というと動もすれば、全身観を忽せにして局処観に捉われがちであった。しかも診察には子宮陰部または内膜の組織検査と尿の顕微鏡検査位が補助診断法としての役割を演ずる位でその外は、現代では既に過去の遺物としてほとんど顧みられないアプデルハルデン妊娠反応が追試せられ初めた程度であって、他はグローブな双合診のみによらなければならなかった。勿論局処には膀胱尿道が存在しているのと、一面には当時京大では泌尿器科はまだ独立しないで皮膚泌尿器科一講座の時代であった関係上からか、婦人の尿障碍の訴えある患者は専ら婦人科を訪れたのである。そして治療法としては、現今もお行なわれているかどうか知らないが、院内処方なるものがあって、その内の烏浸または複烏浸の一点張りであった。因に烏浸とはウバウルシの浸剤、複烏浸とはこれにウロトロピンの入っているものである。慢性化したものには膀胱洗滌が屢々行なわれていた。ヘサチラミンのごときもその後において市販せられた。血尿患者には屢々悩まされた。その頃皮尿科では井上初代教授がまだ講師の時代で、専ら膀胱鏡を担当せられていたので、見学かたがた患者に附添って行ってその厄介になり、膀胱癌、腎結核などの教示をえたのであった。もっとも婦人科領域においても婦人泌尿科学の重要性は夙に唱道せられおり、婦人科の Lehrbuch にも膀胱鏡所見や色刷の鏡見像なども掲載せられおり、伯林大学婦人科の Stöckel 教授のごときも前任地以来その方面に関心を持って色々な報告が発表せられていた。かくのごとく婦人科に泌尿科の知識の必要性は夙に認められていて京大婦人科教室にも何時の時代からか、視診用の単純膀胱鏡と尿管カテーテル挿入用膀胱鏡との二組が器械戸棚の中に死蔵せられていたが嘗て使用せられたことなく、カテーテルもボロボロとなっていた。

そこで岡林教授(ちょうどその頃高山教授後任として教授に昇任)の了解をえて井上講師の下に見学することを許され婦人科の勤務に差支えなき時間で膀胱鏡の行なわれている時に一週に平均約一回一年位の間クルズスをうけたことがある。大正11,2年頃であったと思う。その御蔭で婦人科教室でも尿疾患に対する的確な診断を下しうるようになり、左右側の

尿の分離も行ないうようになった。また子宮頸部癌膀胱進行度も従来は消息子で尿道から触診するに過ぎなかったが膀胱鏡診査により癌浸潤は素より所謂 Bullöses Ödem の像なども見る事が出来るようになった。

なお当時われわれ血の気の多い時代であったから婦人科医たるもの須らく婦人性器の手術のみに安んずべきでない、苟も女性腹腔内軟部外科は婦人科医においても開拓すべきであるとの見解の下に例えば腸管吻合術または腎摘等も試みていたが井上教授の腎摘手術を見学して以来は、大に得る処があって腎門を結紮切断する際の手技等も井上式に行なうように改めた。

その他井上教授直伝でも記憶に残っているのは、尿沈渣からの結核菌染出法である。今では結核菌検出法は他に色々あるであろうが、当時チールガベツト染色で尿中結核菌証明は難事であった。結核菌が陽性でなければならないと思われる場合でも出る時には多量に染まるが大抵の場合陰性で仲々検出困難であったが、井上教授自らは行なわれると陽性であった。そのコツは沈渣をなるべく分厚く濃厚に載物グラスにとって、拡げないで長時間かけて乾燥し染色するのである。要するに染色沈渣を顕微鏡のミクロシュラウベを加減することにより浅深各層を隈なく検出するのである。常識的には沈渣を薄く拡げたいが、そうすることによって菌は散乱して仲々見出し難くなるのである。この方法でわれわれは屢々陽性例をえた。

なお序でながら、同教授はインデゴカルミンの注射は色々な利点をあげて筋肉内を推奨せられていた。

井上教授からクルズスをうけている際に婦人科では女性尿道は短いから婦人科専用のもっと短い膀胱鏡を作ったならば、視野も広くなり鮮明に見えかつ取扱も便利だとの示唆をうけたので、早速岡林教授にその旨進言して、堂坂を介し武井に婦人科膀胱鏡を製作せしめ専らそれを使用するようになった。堂坂のカタログにその当時岡林式膀胱鏡として掲げてあったのは、これであって正に井上教授の発意によったのであった。

その頃の婦人科界の一般風潮として泌尿器科学的関心が高まり、大正13年の日本婦人科学会宿題として安藤画一教授（当時岡山）が担当「婦人の膀胱鏡検査」を報告した。その後単行本となって発行せられた。現今では色々良い専門の参考書が出版せられていることであろうが、その頃のわれわれの参考書としては Casper : Lehrbuch der Urologie, Casper : Handbuch der Urologie, Zangemeister : Atlas der Cystoskopie der Weibes 等であった。

その他泌尿科と婦人科との深いつながりは不妊症である。不妊症というと如何にもその原因が専ら女性側にあるように考えられがちであった。成程女性々器の何処に解剖的乃至は機能的の欠陥があっても不妊症になるのであるが、不妊症の原因として看過すべからざるものは男性不妊症である。不妊の原因はその約 1/3 位が男性側にあるといわれている。精子精液の検査は婦人科におても一応行なっているが、異常を認めた場合には夫君をして泌尿科の診断を仰がしむべく奨めるのである。近時不妊学会が結成せられ、畜産科など色々な専門分野と共に横の連係が緊密になって以来、泌尿科側よりの興味ある報告を身近かに聴きあるいは読む機会が多くなったので、われわれ婦人科医として大に啓発せられるのである。

以上権威ある専門学術雑誌に非科学的な随想、ことに井上教授と筆者とのつながりを思出づるがまま認めたので汗顔至極であるが、一半の罪はかくならしめた編集子にもあるのでなかろうか。